



～延藤が縁側的な視点で今を読み解く～ ENDOKUKAI 2

『ゑびす祭りの山車は何のため？』

ゑびす祭りが11回目を迎え、錦二丁目長者町にはこれからのまちづくりに向けて新鮮な気運がみなぎっている。反面、雑音もいっばいきこえてくる。特に何故山車を出すのかをめぐってのその意義をめぐる話し合いが不足していることからるノイズが目立つ。そこでここではゑびす祭りの山車はこれからのまちの育みに5つの意義があることを明らかにしたい。

ひとつは、伝統の継承。名古屋祭りの名物としての山車揃いは、京都の祇園鉦、尾張犬山祭りとともに、われらの誇り高い山車である。山車の意義は本来神が招き寄せられ乗り移る依代（よりしろ）として引かれる車のこと。恵比寿・大黒様が鎮座される長者町の二福神車は、第2次世界大戦で焼失した。

2010年のトリエンナーレで、東京のアーティスト「KOSUGE16」は、このまちの文化的生命の象徴としての山車の回復再創造を提案し、まちの人々との協働により、新しい山車がつくられた。山車はかけがえない伝統の継承の機会である。

ふたつめは、商いの育み。恵比寿・大黒様の商いの神様に見守られてこのまちの化身は如何に？商

いとは「アキ・ナウ」に派生し、「アキ」（間、間に立つ）を「ナフ」（おこなう、おぎなう）、すなわち、生産者と消費者をつなぐ、繊維と非繊維を補いあう、ハードとソフトを結び、現在と未来を融合する等、ゑびす祭りとは山車は商いの視点から創造的まちづくりへの志を高める為にある。

三つめは、都心地区連携。東照宮の狸々車を始め、かつての名高い昔の各町の山車の名は「狸々酒呑む、鶴は芹、雷ごころごろ、二福神、お湯取り笛吹く、唐子は太鼓打つ、三条小鍛冶の狐面、獅子に牡丹に、橋弁慶」と山車の様が非常によく歌いこまれてきている*。錦二丁目地区の発展の為には、長者町を孤立・閉鎖的に捉えるのではなく、この歌にうたわれているように、地区間相互連携がある。むしろ、その前に錦二丁目内会連携が問題でもある。ゑびす祭りの山車はそのことへの意識を喚起するチャンスである。

四つめは、アートとまちの縁結び。山車はアーティストとまちの人々の協働でつくられ、今年にはまちが自主的に企画・運営へ。山車というやっかいなものは、色々とラブルを生む。しかしトラブルをエネルギーに変えていくプロセスがアートである。即ち人々の出会い・体験・表現・

感動の共有のプロセスに、アートとまちの縁結びの意義がある。ここではアートとまちの境界が無くなら、縁が培われていく。アートにおける創造は常に「私」から始まる。新しいもの、変化の方向は、アートとまちの出会いの現場にいるひとりひとり、私の深みからやってくる。山車は、協働体験と美的表現を通して人とまちを着実に育んでいく。

五つめは、まちのファンを育む。ゑびす祭りの来街者は決してただ安いモノを求めてこの町に来るのではなく、以上の様な伝統と現代、まちとアートのアキナウ（はなれているものをつなぐ）事に共感を寄せて下さる方々も少なからずおられるだろう。山車のあるゑびす祭りは、まちの伝統的価値を活かした楽しいアート表現等を通しての、次から次への創造的価値を求める幅広い長者町ファンを育む。

今年のゑびす祭りにおける山車がこのような5つの面でどのような効果が表れたかについて、お互い省みる話し合いをしながら次年度への発展の糧にして行きたい。（延藤）

〈参考資料〉

*…文化財をたずねて一名古屋の絵画、民俗資料、史跡名勝／名古屋市 昭和45年、P67

今年も長者町名物「糸びす祭り」が11月12日(土) 13日(日)に行われた。糸びす祭りは伝統的な町の祭りではなく、今年で開催11回目となる祭りである。現在では長者町で小売を行うお店も増えているが、元々問屋街の長者町が一般のお客さんに商品を売るなんてもつてのほかというのが、第1回開催当時のまちの人達の考え方だった。その為、第1回は名古屋長者町織物協同組合の設立50周年のイベントとして、1年のみ開催する行事として行われた。ところが、想像以上の成功を収めたことにより、現在までまちづくりの一環として継続開催されている。今では、2日間で約10万人が訪れる大きな祭りに成長しているが、現在もイベントの企画・運営は基本的にまちの地権者、経営者、それからまちを好きな人達で行っている。その為、夏に差し掛かったあたりから次第に長者町のあちらこちらで祭りにまつわる話題が飛び交うようになり、夏が終わるころには、一歩まちへ出ると、誰かが祭りの打合せをしているのに出くわすようになる。

ところで、糸びす祭りとはどんな祭りかというところ「織維問屋さんが、

トに活動する団体「長者町アートアニュアル」である。

糸びす祭り開催中に3回行われた「山車の練り歩き」は凄まじい迫力で、何度も思わず息を呑む場面に遭遇する。十数名ほどの長者町山車曳き衆が威勢のよい掛け声とともに力いっぱい山車を押すと「ゴゴゴ・ゴゴゴ・ゴゴゴ」と音をたててあいちトリエンナールの会場であった織維会館跡地の伝馬町ひろば会場を発する。両側に出店するテナントのギリギリを、時に軌道修正しながら進む姿は圧巻である。

ちなみに、伝馬町ひろば会場では上述の「長者町アートアニュアル」に加え、長者町で活動する「長者町まちなかアート発展計画」「まちの会所 hanare」「大ナゴヤ大学 長者町ゼミ」がそれぞれブースを出展！「長者町まちなかアート発展計画」は、あいちトリエンナール2010の際に集まったアートファン、トリエンナールサポーター・ボランティア、長者町ファンが中心となりトリエンナール終了も継続してアートを楽しみたいという思いで立ち上がった団体である。糸びす祭りでは「クロス巻いた針金(クロスワイヤー)で鳥かごを作ろう」と「布バックを



写真1：たくさんの人で賑わう「糸びす祭り」の様子

年に一度破格の値段で一般のかた達に商品を捌く日」という織維問屋街ならではの特徵に加えて、人が集まる仕掛けが盛りだくさん。メインステージでは長者町有志のバンド、その名も「長者町バンド」やアーティストが歌い、そこでは大道芸人が芸を披露。問屋さんの安売りブースに交じって手作りの商品売っているお店、マッサージや占いのお店までが出店する何でもアリのお祭りである。

今年の目玉は、昨年開催された「あいちトリエンナール2010」でア

ティストが制作した山車を、今年もまちの人達が曳いたことではないだろうか。実はこの山車、トリエンナールの主催者である県は、トリエンナール終了時に破棄する予定であった。しかし、山車の意味と意義を理解するまちの人達により1年間保管され、今年度も糸びす祭りの舞台へ上がることが出来たのである。プロジェクトを主導したのは、トリエンナールで起こったまちとアートの出会いの継続をコンセプト



写真2：長者町の山車の最大の見せ場は「長者町織維街」のアーケード越し!!

作ろう」の2つのワークショップを展開。長者町ならではの素材を使って、私だけの布バックやかわいい鳥かごを作れるワークショップに子どもから大人まで夢中!

「まちの会所 hanare」は、NPO 法人まちの縁側育くみ隊が長者町(錦二丁目)で運営するまちづくり拠点「まちの会所」の活動を母屋とみたくて、コンセプトを共有しながらまちの魅力・価値を表現・発信するデザインユニットである。糸びす祭りへの出店3年目となる今回は、



写真3：「長者町まちなかアート発展計画」の布バック作りワークショップにみんな夢中

祭りにお見えになるまちの長老たちにお茶でもお持ちしながら長者町の歴史・文化についてお話を伺おう!という企画。着物の美女にもてなされ、今まで忘れていたまちのエピソードをポロリとつぶやいてしまったかもしれない。笑。

「大ナゴヤ大学 長者町ゼミ」は、街をキャンパスとして活動する「大ナゴヤ大学」の授業が長者町で行われた事をきっかけに活動が始まった団体で、糸びす祭りへの出店は今年で2回目。長者町ゼミオリジナルの「てぬぐい」販売や、長者町のガイドツアー「ぶら長者」、まちの会所 hanare が制作した「長者町カルタ」を使用したカルタとりブースと盛りだくさんの企画によって祭りを盛り上げてくださる。

糸びす祭りを終えて、改めて我々のような新参者をなんだかんだ言いつつも受け入れて下さる長者町に感謝しつつ、「何でもアリ」などところどころ糸びす祭りの醍醐味であり、だからこそ長者町に引きつけられる人達が後を絶たないのかもしれないと思う。そして、新しい人達を巻き込みながら常に進化し、変化する柔軟性こそが、長者町の魅力なのかもしれないと感じた糸びす祭り。本当に楽しくて、あつという間の2日間でした!!(川澄)

長者町なう! 秋だ! 糸びす祭り!!

長者町でとれたフレッシュなニュースたち...

ENGAWA NEWS 86号
発行日: 2011年11月22日
編集・発行: NPO 法人まちの縁側育くみ隊
〒460-0002
愛知県名古屋市中区丸の内2-18-13
丸の内ステーションビル 2F
TEL/FAX: 052-201-9878

目次

〈巻頭コラム〉
・ ENDOKUKAI ... 1P

〈長者町なう!〉
・ 秋だ! 糸びす祭り!! ... 2P

〈PROJECT ENGAWA〉
・ トーホク志縁プロジェクト ... 4P

〈まちの縁側育くみ事業〉
・ まちの会所通信 ... 8P
・ ジネンカフェだより ... 9P
・ GOGO!ルポ ... 10P

・ 編集後記 ... 10P

東北フツコウとわたしたちのまちの

希望への道筋を考える

「これから起きることを考えましょう。助け合い、楽しく暮らしたい。でも日本の経済状況はとても厳しい。自分たちでなんとかするしかない。再建できないお年寄りも地域で助け合うことをしなきゃいけない。この暮らしの理想像を実現したい。国ではない、自分たちで。そのため、お知恵をいただきたい。」荒浜住民40代、若手の熱のこもった主催者あいさつで、「荒浜のこれからの住まい・暮らしを考える学習会」は始まった。(写真1) 11月の訪問は、地元の人自ら学習会を企画し、延藤・支援チームに要請があった。冒頭彼のいう「助け合い・楽しさ」は平板な言葉とは全く違う。近

年、排除をなくしコミュニティ意識を取り戻す「社会的包摂」がよくうたわれるが、うんと先を行った考えと、最も弱い人を自分たちの地域で守るという責任感をもちながら、みんなにわかりやすい言葉で語った。延藤からの、自分たちのふるさとを自分たちで育んでいく暮らし方イメージとして、真野の震災復興住宅など各地の事例紹介があると、「深沼(荒浜の旧名)の緑は最高。今なくなってしまうが、自分たちで育む緑もいいものだ、と思った。」などと、家のカタチやまちの状況の違いを指摘する人はおらず、「人の暮らしの風景」としてとらえてくれる発言がたくさん寄せられた。(写

真2) この暮らしを実現するための手法はいくつも想定しておいた方がいい、というのが主催者の彼の主張だ。だから今踏ん張るんだ、と。その一つとして、「土地をもちよれる人で自分たちの分と+αの住宅を自分たちでつくり、力の弱い人・高齢者など安い賃貸で住めるようにしよう。」彼は本業のお店の業務を半分にして、自立するまちづくりにむけて活動している。

住民自身のどういった包摂という考えの一言一言に、地域が変われど今まで自分が目指していたのはこれなのだ、と教えてもらったようだった。なぜこんなにすごいのだろう。荒浜には、町内会以外にも隣組・

イナサの風を起こそう
(※荒浜新聞第2号冒頭文章)

「イナサの風は南東の方からの風で情けの風、恵みの風とも言ふ。荒浜の名前を残す歴史を伝えるあの青い碧い海の色、海の匂い、波の音、白い砂浜、子供たちの遊ぶ姿、沖に浮かぶ白い船、テトラポットにぶつかる白い波、遠くに見える水平線、海の恵み生きていた魚、宝の宝庫の海、雄大な太平洋いまでも見つけていた海、西に田畑の恵み、秋には黄金の田んぼ、農作物の収穫、宝の山だつた荒浜。春と秋のお祭り、一年に一度燃えた学区区民運動会、色々な思い出の荒浜、安心して暮らせる町荒浜をみんなが創る行動をおしませるか。」



写真1：荒浜のコレカラノ住まい・暮らしを考える学習会の様子

契約講が残っている。戦後随分簡略化されたとは言え、契約講をはじめとするそもそもが相互扶助を目的としているつながりの意識が脈々とこの地域の人達に受け継がれているのだと思わざるを得ない。それでも、なぜだろう。こんなひどい目にあつたのに、自分のことで精いっぱいだと思うのが私たち現代人だ。そこで住民たちが発行する荒浜新聞の冒頭の文章を思い出す。(前項下部※)併せて、地理学東洋学で有名なオーギュスタン・ベルク先生が「国民的な遺産のいつそう象徴的な取戻し」(※1)と指摘する、高砂に始まり全国に広がった「入浜権運動」が思い当たるのだ。この宣言は荒浜新聞冒頭の文章ととても良く似ている、そして「古来、海は万民のものであり、地域住民の保有する法以前の権利」とある。誤解のないように言っておくが、荒浜の方は「入浜権」を主張してこの文章を書いたのではない。残りたい人も移転したい人も全体を束ねるコンセプトとしてこの呼びかけ文章が



写真2：学習会での幻燈会の内容は「有縁コミュニティ住宅づくり」写真は京都のコラボティブ住宅ユークート

あるのだ。ここで指摘したいのは、ベルク先生も入浜権に象徴されることとして指摘した日本人のもつ「運動の動機としての風景に対する権利」征服する対象としての自然ではなく共生する思想としての風景だ。荒浜新聞の文章を見れば、風景が相互扶助の決定的動機ではないか。脈々とある相互扶助意識の答えは風景にあるのではないか。風景とはなんだろう。前回の訪問での漁師の言葉を思い出す。船が近づけないテトラポットま

で体一つで毎朝毎晩泳いで行き、海水浴客の安全を守るためのネットをもぐってチェックしに行くのだ。「俺は毎日筋肉痛だべ。すごいんだ、これが毎日。」(写真3) また、荒浜における契約講は、燃料として松を利用する権利と、その松林を管理する責務が主だ。風景とは責任ある住民によって守られているものなのだ。私たちが日本人の多くが忘れてしまっていたもの。私は知らなかった。国土を守り、育てるという意識をもち暮らす人々がいるのだ。

学習会のうちの1週間、地元の方からの状況報告に見る現場のウゴキは劇的だった。みなさんは「自己負担巡り分裂」という見出しの荒浜のことを書いた記事(毎日2011年11月10日)をご覧になっただろうか。「移転派」と「残りたい派」の分裂のことだ。今までメディアや市役所からの「防災集団移転」の計画説明が先行していたがために、「防災集団移転」ありきで話し合いは行われ、住民自身お互いがどう



写真3: テトラボットを背景に「あそこまで泳ぐんだから」と浜を守っている自負心を語ってくれる。

思っているかわからないままに討議は繰り返されてきた。しかし、地域の軋轢の中で「残りたい」とは言えなかった人たちが、学習会の効果もあって、「残りたいと思う人は、責任をもって頑張るから残りたい、という意思をまず市長に伝えよう」という流れが生れた。分裂はきつい言葉だが、すごい前進なのだ。防災集団移転一辺倒だった市長の回答は? 12月議会に注目が集まる。一方住民当

表1 まとめ

住民とのやりとりを通して延藤は課題と今後の進め方を下記のようにまとめた。

●住民自ら基本構想づくりの合意形成

(1) 土地利用構想～5つの風景のまざりあい～

- ① 仙台市街地との関係
- ② 緑・農の風景
- ③ 浜辺は市民生活空間、日本の国土・生活の誇り
- ④ 農業と漁業
- ⑤ 風景にとけこむ緑の盛土。土木的盛土でなく風景づくりとして。

(2) 住宅基本構想

- ① みんなが安心して住みつけられる。
- ② 移転と戻りの両方生かせる
- ③ 地域の価値を生かしつつ、立地・形式・暮らし方・負担(自前と公共のわりふり)
- ④ 神々しいとさえ思える地名

(3) 協働コミュニティ構想

- ① 住民・行政・NPO・専門家の、責任・金・知恵を出す関係づくり
- ② ホンネトークができる熟議と対話の場づくり(批判と提案を同時に考えられる)

ることを認め合う進め方をしているかなくてはならない。そのために、1か月に一回の訪問は歯がゆさもあるが、外からできることは、立場の違いを認めあう進め方のお手伝いだ。そして、移転しか道は残されていない地域もあれば、荒浜のような混乱の中からそれぞれの道を認め合いながら移転と戻りとを両方生かすこと目指すところもある。広範にわたる今回の被害で、それぞれの地域の状況にあったきめ細やかな復興構想は国には頼れない。やはり住民自らの構想づくりが重要だ。よそから知った風な口はきけないが、一人一人が言っていることを位置付け評価をし、感動をし、一緒に学び、住民主体の復興基本構想計画づくりのお手伝いをしたい。(名畑)

※延藤による課題と今後の進め方の整理は(表1)参照

*「風土の日本―自然と文化の通感」、オーギュスタン・ベルク、篠田勝英訳、1988、筑摩書房

ーフッコウへの芽生え IIー

塩害にあった農地でフッコウを体現しているかのように咲いていた赤と白の綿花の花は、これでもかという具合に襲われた台風のために冠水してしまった。フッコウの象徴だったのに、、、と皆が肩を落とした。しかし! 10月末に行ってみるとなんと実をつけているではありませんか! 収穫祭は予定より1か月遅れの11月26日。先行して収穫した名取市の同プロジェクトでは品質も上々とのこと。「ちょっとやそっとじゃへこたれないわよ!」なんて強くてかわいいんでしょ。

(<http://www.tohokucotton.com/>)



左: 台風15号によって冠水
(9月22日撮影: 久坂)

右: 綿花の実。このあと弾けて綿が取れる
(10月31日撮影: 延藤)

*東北コットンプロジェクト: 41の団体・会社が参画する。大正紡績(大阪府)が通常の3倍の値段で買い取り、協力メーカーなどが企画を担う。

まちの会所 通信

名古屋市中区錦二丁目の
まちづくり拠点

問い合わせ（担当：名畑）
TEL/FAX：052-201-9878

路上カルタとり！

～長者町カルタの新しい意味の発見～

糸びす祭りにみる各主体の動きについては前述のとおり。まちの会所ハナレでは祭りを機に顔を出してくれる長老をつかまえて、縁側でお茶を振舞い、その代わりにまちでの昔の記憶を伝えてもらう、とう取り組みをしていた。一方隣の路上では長者町カルタのファンになってくれた長者町ゼミが、自らが主体となってカルタ大会を開いてくれている。そこで面白い出来事が起きた。落ち着いてずっとカルタで遊んでいる子たちは、聞いてみるとさすがみんなこ



写真1：「色は匂えど長者町カルタ」に登場する棚橋さんをアイドルのように慕う子どもたち



主人(あるじ)

長者町の人とつくった、
まちを案内するカルタです。
色は匂えど長者町カルタ
©まちの会所/ハナレ hanare.info@gmail.com

のまちの経営者や従業員の子どもたち。お父さんお母さんの働く企業の違いを超えて、お友達になっていく姿はほほえましい。ところで、子供たちはまず始める前に「漢字読めないもーん」という。しかし、1回や

ジネンカフェ だより

「NP 0 法人くれよんBOX」
「かたひらかたろう」
との協働プロジェクト。

問い合わせ（担当：大久保）
TEL/FAX：052-201-9878

ジネンカフェVOL.055

～暮れゆく夏のケーキ交流会～

いつもとは趣を異にして、愛知淑徳大学CCC（コミュニティ・コラボレーション・センター）のご協力の下、暮れゆく夏のケーキ交流会と題する交流会企画を催した。

交流会の内容としては、カップケーキに自分の好きなお菓子をトッピングし、思い思いにデコレーションした後、大きなサイコロを振って出たお題について参加者全員がコメントをしてゆく、という、誠にシンプルな企画ではあったが、これが意外にも楽しかった。カップケーキは参加



写真1：「私のケーキどう?」「わあ、素敵です～」

者の人数分、くれよんさんの職員・有山美波さんが当日早めに出動し、焼いてくれることになった。感謝である！

交流会は先ず自己紹介から始まった。総勢10名。賑やかだった昨年末での交流会に比べて少し淋しい気もしたが、空間的にはこれぐらい良かったのではないだろうか。それぞれの自己紹介が済むと、早速ひとりひとりにカップケーキが配られ、デコレーション開始である。器に盛られてテーブルの中央に置かれたお

るともう2回目は大人では本気でも勝てないぐらい上達する。そして、3回目、驚いたことに大人のいないスキに、子供の自ら読み札を読み、自分たちで遊んでいる。私たちのいう「こんなことがあったからこの札はつくられたんだよ」という解説と絵札のイメージをすぐに結び付け、加えて漢字まで完璧に読めるようになってしまふ。そんな様子に驚きを隠せずにいた祭りの終盤、毛糸屋の棚橋さん（84歳）が縁台にかけつけてくれた。実は棚橋さんはカルタの「主(あるじ)」という札の絵にもなっ



写真2：路上カルタ大会の様子

ているかわいいおばあちゃんだ。子供たちに、「主(あるじ)」って、ここにいらっしやる方よ、と発表すると・・・子供にとてカルタに登場する人物は憧れのアイドルの様な存在だ。ちっちゃいおばあちゃんは「写真とって写真とって」と興奮する子供たちにあつという間に囲まれて、とつてもうれしそうだった。(写真1)高層ビルが立ち並ぶ都心の路上での小さな小さな出来事だが、都心にあつて絶対にとぎれさせてはいけない小さな物語のはじまりがたちあらわれていた。(名畑)

菓子の中から、自分がトッピングしたいお菓子を選んでホイップクリームが乗せられたケーキの上に乗せてゆく。障害があつてひとりデコレーションが出来ない人には、淑徳大学の学生さんやCCCの職員さんが付いてサポートしてくれた。案外これが皆さん楽しそうで、やや硬かった空気もこれにより解れたようだ。

ケーキデコを30分ほどして、サイコロお茶会に突入した。これは大きなサイコロの面にそれぞれお題を貼り付けて、振って出たお題に参加者全員がコメントしてゆくというものだ。そのお題とは・・・(どんな活動(仕事)をしていますか？ そのきっかけはなんでしたか？ 楽しいところは？)「自分をひと以外の生き物に例えるは何ですか?」「生まれ変われるなら誰に生まれ変わりたいですか?」「タイムスリップ出来るとしたら・・・(最近、はまっていること)」「最近、気になっていること」という6つである。

今回の交流会は、参加人数は少なかつたものの、あたたかくて和気藹々とした雰囲気の中、参加者同士が楽



写真2：『どんぎつね』の世界をイメージして・・・

しみあう交流会になったのではないだろうか。それは開放的なくれよんBOXさんの空間の力と、この交流会をよりよいものにしようというスタッフの人間力と、そして何よりも参加して下さった皆様の笑顔のおかげだと思ふ。開放的な空間は人々に安心感と朗らかさをもたらせ、人々の笑顔と楽しげなふるまいはその空間を生き生きとさせる。

人と空間との相乗効果により、ジネンカフェVOL.054はささやかだが、心楽しい交流会として幕を閉じた。(大久保)



写真1:「まちの縁側 GOGO!」の看板

「GOGO!」看板設置完了!

GOGO!
ルポ

名古屋市東区の縁側事業!

問い合わせ(担当:永井)

TEL/FAX: 052- 930-2505

玄関口の高い所と3階の柴田ビルの北面壁にある看板を、やっと半年かかって「MOMO」から「GOGO!」に書き換えました。自分でやるうかと迷っていましたが、やっぱり専門家、東片端の大進堂さんにお願いました。

地域情報誌「ショッパ」

に掲載されました!

中日新聞の折り込み新聞「ショッパ」2011/9/29(木)発行に、「GOGO!」のすてきな紹介記事が掲載されました。

- ・ みんなで過ごそう「憩いの場」
- ・ 音楽や運動で生き生きと過ごそう
- ・ 新たな憩いの場「まちの縁側」がスタート

以上は活字の大きさを変えた見出し。紹介文も「私が話した事、伝えたい事、私の想い!」を的確に表現してくださいました。

「まちの縁側」はNPO法人「まちの縁側育くみ隊」が進めるプロジェクト。そこに行けば誰かに会えて、ふらりと立ち寄っても温かく迎えてくれる場所です。「音楽とスポーツ、

文化がいっぱい」をテーマに運営しています。

みんなで作る

「第79回ほのぼのコンサート」



写真2: 琴演奏 丹羽紀子

「GOGO!」のメインイベントは、第1火曜日に「Lokocafe」で開かれる「ほのぼのコンサート」です。

「ちょっとした出会い、ささやかなご縁、細々としたつながり」が実現できる場所です。(永井)

編集後記

皆さまこんにちは。気がつけば11月も下旬にさしかかり季節は秋から冬へと移り変わろうとしています。なんて1年は早いのでしょうか。今回の縁側ニュースは長者町の秋の風物詩である「糸びす祭り」特集!糸びす祭りの見どころや臨場感が皆様に伝わっていたらとても嬉しく思います。

ところで、風物詩といえば、延藤文庫の絵本「SEASONS」は素晴

らしく美しい版画で四季の暮らし・風景が1ページに1シーンつづられている文の無い絵本です。読み進めると少しずつ季節が移ろい、1冊読み終えると1年が過ぎているという構成。思わず何度も何度もパラパラと眺めています。ひとつひとつの題材が四季の風物詩と呼べる出来事ばかりなのですが、きっと、絵本の中の当事者にとっては当たり前の出来事ばかりだし、時

川澄一代

まちの縁側育くみ隊会員。現在、地域との関係を大切にしたい暮らしを実現する建築のあり方を模索中。川澄一代設計事務所主宰。

にはケガをしてしまうなどあまりハッピーとは言えない状況も……。でも、そんなひとつひとつの「いつも」の出来ごとが折り重なって風景は作られていくのかもしれない。

ENGAWANEWSも、積み重ねることで、ある風景のようなものが描き出せるようになったら嬉しいです。

SEASONS

作: Blexbolex

出版: Enchanted lion books